

湯微島の隣りの島



伊井直行

レワニワ書房

湯微島の隣りの島

残念だったな。俺がいたのは、湯微島じゃないんだ。湯微島の隣りにある小っちゃな島だね。ま、連絡船は湯微島からしか出ていないし、湯微島の一部みたいなものなんだが。

いや、「一部」なんて言ったら、湯微島の連中、怒るだろうな。その理由は、すぐに分かるはずだが、それはともかく絶対に俺の名前と、俺が誰かって分かるような特徴を書いてもらっては困るよ。でないか……あんたのこと、ただじゃ置かないからね。

湯微島の採石場に仕事があると聞かされ、俺はそこで働くことにした。ところが、行ってみると、湯微島は小さいながら定期バスの路線がいくつも走っている活気に富んだ島だったんだが、採石場は湯微島の港から連絡船でさらに二十分ほどの別の島にあることがわかった。湯微島には会社の事務所があり、俺はブルドーザーの運転手として登録された。採石場のある島を、そうだな、仮に固石島かたいししまと名づけておこうか。本当の名前は言わないよ。調べれば、すぐに分かっってしまうことだけだ。

その固石島を、湯微島の人はみな「ドロボー島」と呼んでいた。事務所の人たちは「頑張っ
て下さい」くらいしか言わなかったが、湯微島の旅館や酒場で知りあった人たちは、俺が

固石島の採石場で働くのだと告げると、いわくありげな薄笑いを浮かべたり、同情するような目でこちらを見たりする。中にはこうハッキリと忠告してくれる人もいた。

「くれぐれも気いつけなはいや。あすこはドロボー島いうぐらいで、住んどののは一人残らずドロボーなんやから。身ぐるみはがれん内に、早よ逃げ出すのがあんたのためや」

俺は信じなかった。そんな島がこの日本の国にあるはずがないと思ったし、俺は湯微島近辺の色んな島に行ったことがあって、それで気づいたのは、島びとたちはたいい人柄は悪くないんだが心の狭いところが見られ、自分の身内以外の人、中でも近くにあるよその島の人を悪く言う傾きがあった。これも、そんな悪口の一つだろうと俺は思ったんだ。

船の故障で出発が遅くなり、湯微島を出たとき日はもうとっぷりと暮れていた。漁船や貨物船の灯が暗い波の上をこちらに向かい、あちらに行きし、遠くの灯台の光は、黒と区別をつけるのがむずかしい群青色の夜空を明るくするでもなく、ただ淋しげにグルグル回っていた。船が港を出て針路が定まると、すぐに三角おむすびの形をした真っ黒な固石島の姿が目に入った。島影は近づくほど濃さを増していく。海に突き出した岩や、その上に生い茂っている木々のつくりだす形が影絵のように——といっても、暗い背景の上により暗い影が重なるという夜目の利く人向けの影絵なのだ——見分けられるほど近づいても、人家らしい明りは一つも目に入らない。本当に人が住んでるのか心配になり、にぎやかしになるなら泥棒

だって歓迎だと心の底から思ったものさ。

ところが、船が固石島の岬のサキップを通り過ぎると、とたんに町の明りが目に入った。そうなんだ、岬の向うに小さな湾があって、その一角に古代ギリシアの円形劇場のような格好で町がへばり付いていたんだ。……俺が「古代ギリシアの円形劇場」なんて言ったら、変かい？ この間、ボスポラス橋の工事でトルコに行ってたんだがな。ま、それは置いとくとして……岬の方からすると湾の反対側になる町のはずれが、俺の働くことになる場所で、切り取られた山の岩肌が暗闇の中に白く浮き出て見えた。採石場は、夜見るに限るな。昼間は赤裸にむしり取られた地面がむき出しでムザンなだけさ。

港に着くと、灰色の作業服を着た初老の小柄な男が俺を待っていて、作業員用の寮に案内してくれた。極度に無口な男で、話しかけても「へえ、へえ」と生返事をするだけだった。遠目にはずいぶん明るく見えたのに、固石島の町も所詮小さな島の小さな町で、ふたり横に並べば肩が軒に触れそうな細い道を明るくするのは、家の窓明りだけ。もっと幅の狭い石造りの階段は、街灯がないので足もとに気をつけていないと蹴つまずきそうになる。そんな風にして、町はずれの、採石の現場がすぐ近くに見える木造二階建ての寮まで歩いていった。

寮の中はやけに静かで、他に人はいないのかと聞いたら、案内役の男は一言「いんや」と答えた。部屋は一人用で、ちゃんと鍵もかかるようになっていた。

俺はひどく疲れた気がして、そのまま布団をしいて眠ることにしたのだが、ついさっき、船の上では、泥棒だっけしてくれたらありがたいと思ったはずなのに、大した金が入っていないでもない財布を握りしめつつ眠ったものだ。

翌朝目覚めてみると、財布はもちろん、部屋の中の物も全部無事だった。それどころか、それから一週間、何事も起こらなかった。俺の身の回りから何一つ消えた物はなかった。まあ、それなりに注意を怠らないようにはしていたのだが。

俺は、同じ寮住いの藤原という男に聞いてみた。寮住いってことは、固石島の地の者じゃないということ、でなきゃ、こんな質問はしないね。

この島に来るにあたって、あすこはドロボー島だからってずいぶん脅かされた。それにしちゃ何にも起こらないが、と。

藤原は、固石島に来て半年になるという二十四、五歳見当の男なのだが、「本当にドロボー島ですよ」とあっさり答えた。

「この住民のうち俺達みたいなよそから来た作業員が一割、残りの中でまじめなカタギの人間が、何人位いますかねえ。十人いるか、いないかじゃないですか」そして、声を低くして「役場の出張所員も学校の先生も、丸め込まれてるんです。今も百人以上の島の者が、何人かずつ組になって日本中を泥棒行脚しているはずですよ。夜更けに港を出て夜明け前に帰ってくる漁船があるでしょ。あれは密漁に行くんです。それと、時には、盗品の輸送もしているらしい」

少し間を置き、今度はやっと聞き取れるくらいの声で「こんな話をするのはヤバイですよね。秘密を知った人間は命を盗られちゃう。それで、ズタズタの切り身にして魚の撒き餌にする——なんて、これはこの間採石場をやめて出てった人に聞いた話ですが。でも、島の中では、かえって盗みはないようです。だって、みんな泥棒なんだから、お互い盗り合いを

始めたら收拾がつかなくなるでしょ。島ぐるみ仲間なんですよ。でも、注意を怠ってはいけません。島の中でも、よそ者は狙われますから。最初の一週間は、様子見です。給料が出たところで、スパッと持っていく。それが、この島のやり方です。僕も、一度、給料を根こそぎやられました」

「そのやられたっていうのは、寮の中でかい？」俺は藤原に尋ねた。

すると、藤原は「いや、まあ、そんなこんなで……」と言葉をにごし、あやふやなニヤニヤ笑いを残して、俺の前から立ち去った。で、その直後に気づいたのだが、俺は藤原に島の秘密を聞かされてしまったから、いつでも切り身にされて魚の餌になる資格ができたというわけだ。聞かなきゃよかったと思ったものの、あとの祭りだ。

どうしてすぐに逃げ出さなかったのかと聞きたいんだろ？ 島を出て新しい仕事が見つかるのか心配だったし、藤原の話をすぐに全部信じたわけでもない。ここが本当にドロボー島なのかどうか、本当にそうなら中の様子はどうなっているか、見てみたくもなかったんだ。俺は、性懲りもない物好きなんだよ。それでなきゃ、流しの土木作業員をやって、トルコくんだりまで出かけたたりするもんか。

作業員の給料は、毎週土曜日の午後に一週間分まとめて渡されることになっていった。俺が最初の給料をもらった土曜日の夜、寮の連中の殆どが外出のしたくを始めた。聞けば、みな

会社の船に便乗して湯微島に行くと言う。湯微島から働きに来てゐる奴はわかるが、そうでないのも、俺に話を聞かせてくれた藤原も同様だった。日曜日は寮で食費を取られるし（月曜日から土曜の食事代は、給料から天引きされる寮費に含まれているのだ）、休みの日に固石島にいたって面白ありませんよ。藤原はそう言って、意味ありげな薄笑いを浮かべる。俺は固石島に残ることにした。寮で食費を取られるといつても、湯微島に行けば泊りの宿賃が必ず要なわけだし、固石島の中を一日かけて見てみようという気持ちもあった。その晩は、寮の自分の部屋でたった一人、給料袋をだきかかえて眠ったよ。

翌日、俺はもらった給料袋を中身そのまま持って出かけた。部屋に置いていくのが心配だったからだ。町の中をフラフラ歩いてみたが、何の変哲もない。ちっちゃな子供がばあさんにお守りされてる。おばさんたちが立ち話をしたり、ポリ袋を下げて道を歩いたりしてる。港ではいいさんたちが何人か集まり、あるいはひとりっきりで暇を持って余している。若者や大人の男の姿はごく少ない。離れ島や山奥の村は、みんなこんなようなもんだ。しかし、そんな島人のそばを通りすぎたあと、よそ者の俺は、ひどく鋭い視線でもって見送られている気がした。歩きながら、のんびりした町の風情とは裏腹に、ピリピリした緊張感が伝わってくる。気のせいというには、余りに生々すぎる感触なのだ。

町と周辺を歩き回って昼になり、飯を食おうと思ったんだが、どうやら島の中にはたった一軒しか食堂がないらしかった。地の者もよそ者も、島の中にいて、家や寮以外の場所では飯を食ったり、酒を飲んだりしたいと思つたらここに来るしかない、そういう店だ。ペンキ塗りの看板に「さかな家」と出ていた。

俺は磨りガラスの入った引き戸をガラガラ開けて中に入ろうとした。ちょうどその時、店から外に出ようとした奴がいて、俺と鉢合わせになった。鉢合わせといっても、俺の胸と相手のおでこがぶつかったんだが。

「気いっけえや！ このメッカチ」

俺とぶつかった相手は、白い運動服の上下を着た小学三年生くらいの男の子だった。固石島の人たちは、子供もふくめて、みんな言葉が荒いんだ。

「お前こそな、ガキ！」

俺がそう言い返したとき、男の子は、家と家の間、向かい合った軒先がぶつかりそうになっているその下の道を、風のように走って消え去ろうとしていた。

店の中に向き直ると、客たちは、笑いを見交わしたりする。町では見かけなかった大人の男たちが、店の三つ、四つのテーブルと小さな座敷を占領して、酒を飲み、飯を食っているのだった。空いている二つのテーブルのうちの出入り口に近い側にすわった。俺は、壁の品書きを見るふりで、周囲を観察した。先客の男たちも、テーブルごとに、ぼそぼそと俺にはよく分からない方言で囁き交わしながら、時々こちらをうかがっている様子だ。こいつらが全部泥棒かと思えば、どれもこれもそれらしい人相に思えてくる。ひとつ心強かったのは、よそ者の観光客らしい男性三人組がいたことだ。離島巡りという呑気な趣味の持ち主たちなんだろうと俺は考えた。

なかなか店員が出てこないなと思ひ始めた時、店の奥から白いかっぽう着姿の少女が、ウ

ドンが入っているらしいどんぶりを二つ手に持って現れた。少女は俺には目もくれず、座敷の方に近づいて行く。俺は注文するのを忘れて、呆然とこの様子を眺めていた。何とか……驚くほどの美しい少女だったのだ。年の頃は十八、九。真っ先に目を引くのは強い光を放つ瞳だ。形のいい唇、島人とは思えないほどの白い肌、束ねた漆黒の髪、くびれたウエストと適度に張り出した腰、まっすぐにスリりと伸びた足。こんな離れ島のうらさびしい食堂の店員にしては、どう考えても美しすぎる。少女は座敷の卓にガタンと音を立ててどんぶりを置いた。男たちの一人が少女に何か言う。少女はつつけんどんな、しかしお互い気やすい者どうしであることがはっきり分かる調子で言葉を返す。

少女が振り返った。俺の注文を聞いてもらうために、こちらに呼ばなくては。——しかし、声が出ない。その時、別のテーブルから声がかかった。

「トモコヤン、こっち酒二本追加。それとサバ煮な」

「トモコヤン」と呼ばれた少女は、返事をしないで店の奥に消えた。消え去りぎわに俺の方をチラリと見た気がした。俺は、少女を「トモコヤン」と下品に呼ばわった目つきの悪い中年男を憎んだ。

少女は、すぐに店の奥から出て来て、注文の品をさっきよりさらに大きな音を立ててテーブルに置いた。そして、店中に聞こえる声で言った。

「今度ウチのことトモコヤンて呼んだら、承知せえへんからな」

男たちは、グズグズとこもった笑い声をあげた。

「トモコ様と呼ばなあかんなかな」

「トモコお嬢様でないか、悪い悪いんかな」

トモコさんは、男たちの冗談口を無視して、出口に向かって歩き出した。どこに行くのだろうかと一瞬思ったが、俺のテーブルにやって来たのだった。

「お客さん、何も注文せんとすわっとっても、しょうがないと違うか」

「アッ、エエ……」トモコさんの美しい目に見つめられて、すぐには言葉が出て来ない。店中の客の視線が俺のところを集まるのが分かった。

「ええと、ビール。それとサバ煮」

「お客さん、惜しいわあ。サバは、さっきのでおしまいや」

「えっと、じゃあ、アジのタタキ」

「悪いなあ。今日はアジが入っとらん」

「じゃあ」俺の正面にはひとときわ大きい品書きがあり、『おつくり各種・時価』と書かれている。

「おつくり」

「おつくりは、もうタイしか残っとらんのやけど、それでいい？ ちょっと値が張るけどな」

俺は、美しいトモコさんの前で、高いなら要らないなどとは言えなかった。

トモコさんは店の奥に向かって「おつくり、タイのおつくりの注文や」と大声を出した。

客たちがニヤニヤ笑う。俺は、どれだけぼったくられるのか不安になった。上着のポケットに手をつっ込み、給料袋を撫でさすって、まさかこの中身全部より高くはないはずだと自分に言い聞かせた。

トモコさんがビールとコップを持って来て、ドンドンとテーブルの上に置いた。俺は、自分の不安を悟られたくなくて平静を装い、トモコさんに話しかけた。

「へさかな家」っていうのは、面白い名前だね」

客の視線が、再び俺のところに集中する。

「へえ、そうかね」とトモコさん。

「だって、魚屋にお使いを頼まれた子供が、この店に来てシャケの切り身を下さいなんてことになりかねないじゃないか」

冗談のつもりだったが、トモコさんはニコリともしない。

「この島に、サカナヤはうちしかないから、そんなことは絶対おこらへんわ」

「え……?」

「魚ほしかったら近所の漁師のうちでもらうか、港に行けばすむんやから、この島に魚売ってる店なんかあらへん。サカナヤいうたら、うちのとこに決まっとる」

店の中に忍び笑いが広まった。

「アホラシ」そう言い捨てて、トモコさんは店の奥に消え、俺はうつむいてビールをコップに注いだ。

タイの刺身は欠けた皿にのっかってきたが、結構うまかったし、量も多かったから、ますます値段のことが心配になった。しかし、ついビールの酔いにまかせて、日本酒を一合と、腹の足しにウドンまで頼んでしまった。この間、新しい客は一人もなく、また店から出て行く者もなかった。よそ者らしい三人組も、沈んだ表情でテーブルを囲み動こうとしない。

結局、俺が、最初に店を出る客ということになった。

「お姉ちゃん、勘定！」

トモコさんがかっぼう着のすそで手を拭きふき現れ、チャホヤされるのになれきった女に特有の心のこもらない微笑みを浮かべて、

「千円ちょうど」と言った。

俺はホッとした。そして、嬉しかった。こんな勘定なら、毎日だって飲みに来られる……。俺はポケットから給料袋を取り出し、中にフッと息を吹き入れて千円札を取り出そうとした。酔っぱらって頭が変になったのかと思った。千円は確かにあった。しかし、それだけしかなかったのだ。全部で四万円弱はあったはずなのに、袋には千円札一枚だけしか残っていなかった。

「お客さん、千円」とトモコさんは繰り返した。

やられた——しかし、いつの間に？

「お客さん、どないしたん？ まさか、金ないなんて言うんやないやろね」

「あるさ」俺は内心の動揺を抑えて答えた。そして、千円札一枚だけ残った俺の全財産を、しけた食堂の美し過ぎる女店員トモコさんに手渡した。

「ありがとう。また、おいでや」という声に送られて、俺はフラフラと店の外に出た。

寮に戻り、少し冷静になって考えたのは、どうも俺の給料が盗まれたのは、あの運動服のガキとぶつかった瞬間らしいということだ。連中は、町の中を歩いている俺が「へさかな家」に来るのを予め察知していたのに違いない。俺の給料袋を抜き取り、千円だけ残してポケットに返したのは、あのガキひとりでやったのか、それとも他の奴も手を貸したのか、いずれにせよ驚くばかりの練達の技だ。そして、ひとつ確実なのは、盗んだ奴と「へさかな家」がグルだということだ。トモコさんは、俺が千円しか持っていないのを知っていた……。勘定を払える分だけ残して盗み取るとは、なかなかシャレたやり口じゃないか——負け惜しみじゃなく、半ば本気で感心したね。

いずれにせよ、俺は文無しになった。訴え出ようと思っても、固石島には警察官がいない。湯微島の警察と連絡を取っているのは島の消防団だが、こいつらはみんな泥棒の仲間と聞かされている。というより、消防団は、藤原の話によれば、泥棒組織の中核を成しているらしいのだ。

俺は、半分口を空けてテレビを眺めている寮の管理人——港に迎えに来た無口な男——に、さっき金を取られて無一文になってしまったと告げた。管理人は「へえ」と言っただけで、驚く素振りさえ見せない。こいつも泥棒の一味なんだろう。俺は、続けて、そんなわけで、今日の分は次の給料日に必ず払うから、晩飯をつくってもらえないかと頼んだ。

男は「だめ」と答えた。

「そこをなんとか」

「休みの日の食事は現金前払い」男はそう言った切り、とりつく島もないという様子で、テ

レビに注意を集中する。

夜になって、湯微島に行ってた連中が帰って来た。俺が腹をすかして自分の部屋にひとり横になってみると、藤原が小さな寿司折りを持って現れた。

「おみやげですよ。晩飯食いそなったんじゃないかと思って」

「そうなんだ。こりゃありがたい」

俺は体を起こした。

「やっぱり、やられましたか。へさかな家〓に行つて——？」

「そうだけど、何でお前に分かるんだ？」

「新入りは、たいていやられることになってるんです。寮以外で飯が食えるのは、あそこしかありませんからね」

「それなら、先に教えておいてくれよ」

藤原は「大声を出さないでください」と言って、俺を制した。

「新入りでへさかな家〓に顔を出さないとすると、誰かに島の秘密を教えられたんじゃないかと疑われます。そして、その秘密をしゃべったのは、あなたと一番よく話をしている僕じゃないかってことになるでしょう。寮の管理人は、よそ者を見張る監視人でもありますから」

「しかし……」

「まあ、この島にいる限り大して金は要らないし、使いみちもないでしょ。次の給料日までの辛抱です。少しなら、僕が用立てします。へさかな家〓に、鄙ひなには稀っていうか、どんな都会に出しても通用しそうな超弩級の美人がいたでしょ。性格と言葉がちよっと難だけど。」

あの子の見物料だと思って、今回は諦めるしかありません」

「あれは確かにスゴイ。しかしなあ……」四万円は高過ぎる。服も着ていたし、こちらは手の指一本触っちゃいけないのだ。

「あの子は熊獲り罾の蜂蜜なんです。行けば盗られると分かっているのに、蜂蜜の匂いに負けちゃう奴もいます」

「しかし、そうと分かかってりゃ、金を置いて行けばいいじゃないか」

藤原は首を振った。

「寮のどこに隠しても、管理人にかぎつけられてアウトです。島のどこか他の場所に？ それは、島の人たちに、どうか盗って下さいと差し出しているようなもんです」

「つまり、〈さかな家〉には金輪際近づいてはいかんのだな。それで、みな湯微島に行くわけか」

「そうです。湯微島には、ただ遊びに行ってるんじゃないありません。実家のある奴は、給料の大部分を家において来ます。そうでないのも、信用の置ける友人や知人に預けるし、会社の事務所でも預かってもらえます」

「なんだ、なんだ。じゃあ、会社の方で、俺にそう教えといてくれれば良かったんじゃないか」

藤原は再び首を横に振った。

「会社でやってるんじゃないなくて、事務所の人が個人的な副業としてやってるんです。手数料を取られますし、信用するかどうかもこちらの判断ですから」

「ふう。俺は、まったく何て所に来ちまったんだろう」

「ドロポー島に来たんですよ」藤原はそう言ってニヤリと笑った。「今度の土曜日は、湯微島に行きますか？」

「行く、行く。行くとも」

「そして、もう固石島には戻って来ない？」

「うん……いや、そうもいかん。こここのペイは結構いいからな」

「そうですね。僕もあと半年は我慢します」と藤原は言った。「十分に金がたまったら、こんな島にはオサラバして、結婚するつもりです」

「へえ、そうか。そりゃいいな」

藤原は、実に嬉しそうな、はにかんだ笑顔を見せた。

「しかし、結婚間近の彼女と離ればなれじゃ、お互いさびしいだろ？」

「いえ、そうでも。週末には必ず会えますから。彼女、湯微島の間人なんです」

「なんだ。ますます結構だね、こりゃ。一度、俺にも顔を拜ませてくれよ」

「いいですよ。今度の土曜日にも」

こうして、俺の次の週末の予定が決まった。会社の事務所の人間と藤原の彼女と、顔を見てどっちか信用の置きそうな方に給料を預けようと考えていた。湯微島には、俺の知り合いなど一人もいないからだ。

次の土曜日、俺は藤原に案内されて、奴の婚約者の家に行った。家族は町内会の旅行で島の外に出ているから、遠慮なくどうぞと言う。

彼女の家は、暗い裏通りの一角にある小さな一軒家だった。藤原は、勝手知った様子で中に入って行く。ところが、あとについて上がり込んだ俺を出迎えたのは、想像していたような若い女性ではなかった。

悪い夢を見ている気がした。黒服に角刈りのゴリラのようなドデカイ男が玄関の横に突っ立っているのだ。男は、無言で玄関の扉をビシリと閉めた。

「藤原、お前……」

藤原は、ペコリと頭を下げた。

「嘘言ってますみません。こうするより仕方なかったんです」

ゴリラ男は、背広の内ポケットから、何か黒い小さなものを取り出して、俺の眼前に差し出した。俺が後ずさりすると、ゴリラ男は、その小さな物体をさらに俺の顔に近づけようと手をのばす。俺は、壁際に追い詰められてしまった。

藤原が何か言っている声が聞こえる。「逃げずに、見て」とか何とか。

俺は、眼前十五センチに浮かんでいる物体を、初めて正視した。

それは、黒革の手帳らしかった。表には、金色にピカピカと何かのマークが輝いている。見覚えのある、しかし、どうも余りいい思い出ではなさそう……。

——警察手帳！

「驚かして、申し訳ありません。私は県警捜査二課の山中といいます」

ゴリラ男はそう自己紹介した。

「なんだ、そういうことか。藤原、俺はまたお前がアッチの方の趣味の持ち主で、こちらが婚約者かと……」

座敷に上がって、藤原と山中は改めて俺に謝意を表した。そして、固石島の泥棒組織を摘発するために藤原が内偵をして来たこと、内偵は最終段階にさしかかっているが、藤原ひとりでは手に余るところが出てきたため、俺に協力してほしくて、こんな無礼をあえてせざるをえなかったことを明らかにした。

「藤原が警察の人間だなんて、考えもしなかった」

俺が眩くように言うと、藤原が、島にいる時より丁寧な調子で答えた。

「それを察せられるようでは、この役目は務まりません。慎重に、ごくごく慎重に仕事を進めて来ました」

「しかし、俺なんかに秘密を明かして、協力を求めるっていうのは……」

「これも、慎重に考えた上でのことです」と藤原は言った。「この二週間、あなたが信用できる人物かどうか、正義感に富み、大仕事をこなす器の持ち主かどうか、じっくり見てきました。その上で頼んでいるのです」

「いや、正義感なんて、俺は——」

「仕事自体は、そんなに難しいものではありません」山中の口調には、イヤとは言えなくなってしまう迫力があつた。「あなたが平常心さえ保っていられば、大して危険でもありません」

せん。へさかな家〉の常連客になること、それだけでいいんです」

藤原が言葉をはさみ、それを再び山中が引き取った。

「へさかな家〉には、泥棒組織の幹部連中がたまっている、情報交換をしたり、各地の部下に指令を出したりしています。もっとも、よそ者がいるときには、そんな話はしません。よそ者が来たら、彼ら本来の泥棒仕事をやるだけです。彼らの組織に入り込んで情報を取ってくる、何ていう仕事をあなたに期待している訳じゃないんです。へさかな家〉にどんな客が来てるかということも教えてもらいたい。それと、何か特別変わった動きがあった時は知らせしてほしい。それだけです。内偵も最終段階ですから、奴等がこちらの動きを察知していないのが気懸りです。そして、それさえ分かれば十分なんです」

「その役には、あなたが最適任です」藤原が久し振りに笑顔を見せた。「新入りのよそ者が、へさかな家〉のトモコにぞっこん惚れ込んで通いつめる、という一番ありそうな形で、あの店に入り込みたいんです。つまり、熊獲り毘の蜂蜜を逆用する訳ですね」

「ぜひともお願いしたい」

山中が深々と頭を下げ、藤原もそれに倣った。

結局、俺は引き受けたんだ。この時初めて知ったよ、自分が命まで賭けてしまうような呆れ果てた物好きだってことをね。

しかし、ただの物好きで引き受けた訳でもない。県警の方で、俺がへさかな家〉に払う飲み代を負担してくれると言うんだ。しかも、捜査終了後に、別途礼金を支払う、とも。

「表立って差し上げるお金ではないし、貧乏県警なので、あまり多額を期待してもらっては

困るんですが」と山中は付け加えた。俺としては、懐の心配なくへさかな家へに通えるだけでもありがたいようなものだった。

俺は、山中が用意していた誓約書にサインした。捜査中と、捜査終了後の秘密保持を約束するものだ。

「あなたの安全の確保には、全力を尽くします」と藤原が言った。

山中は茶封筒を取り出した。

「三千円入ってます。一週間分のへさかな家での飲み代です。一週ごとに藤原君の方からお渡しします。連絡等は、すべて藤原君経由にして下さい。また、こちらにお呼びして、直接話する機会もあると思いますが、その時以外は、一切交渉なしということで」

何だ、三千円ぼっちゃか、とちょっとガッカリしたのは確かだ。俺は、今度は三千円の受取りにサインさせられた。

それから、山中は、俺を信頼している、頑張ってくださいと言ったあと、ちょっと切り出しくそうに「申し訳ないが、これから藤原君と二人で打ち合わせしたいので、今日のところは引き取り願えませんか」と付け加えた。

それには、俺も異存はなかったが、こちらにも頼みたい用事がないわけじゃない。

俺は、単刀直入に切り出した。

「まるっきりのよそ者で、湯微島には知った人間が一人もない。給料を警察で預かってもらうわけには……」

山中は困惑の表情になり、藤原と小声で相談したあと、「よろしいでしょう」ということ

になった。

俺は、給料袋から三千円を抜き取って、残りを袋ごと山中に渡した。

「県察の名前で預かり証を渡すことはできない」と言うので、山中個人の名でサインをもらい、さらに警察手帳のページにも同じ内容を書き写して、そこには俺のサインを残すことになった。

こうして、俺は、採石場の作業員と警察のスパイという二つの仕事を一時にやることになったんだ。

7

それから、日曜日には必ずといっていいほどへさかな家へ顔を出した。山中との連絡で、湯微島に行く時に休むくらいだ。給料は、週末ごとに湯微島に行く藤原に託し、内二、三千円を手元に残す。藤原が山中の署名入りの受取りと、県警の金三千円を持って来る手筈なので、俺は日曜日以外にも週に一、二度はへさかな家へ行くことができた。そうして、すぐに分かったのは、同じ寮の中でへさかな家へ通いつめている奴が、俺以外にあと二人いることだった。

へさかな家へには、所持金を全部持って行く。寮の部屋に置いておくと、まず間違いない消えてしまう。店に入る前からポケットの中でお札をしっかりと握りしめ、最後まで離さないようにする。それでも酔いが回って、ちよっとでも注意力が薄れると、きっと金はなくなっ

いた。

いくら通っても、〈さかな家〉ではお馴染み扱いはしてもらえなかった。常連の泥棒たちと顔馴染みになったが、話に加えてもらえないどころか挨拶すらなく、店に入る度に「また来たか」という不快そうな表情を見せつけられる。寮の他の二人も、まったく同じ扱いだっ

た。「お目当て」のトモコさんの態度も、常に変わりなく冷たい。何度通っても、初めてきた客の扱いだ。機嫌が悪ければ、注文が聞こえないふりをするのも平気だ。寮から来た三人は、まるで客というより我が儘な王女を絶望的に慕いつづける愚かな僕しもべというところだった。しかし、俺たち三人は慰め合ったりはせず、トモコさんをめぐるライバルどうしとして、毅然として互いを無視し合っていた。俺は、このような状態を惨めとも何とも思わなかった。俺にとつて、〈王女〉と〈僕〉の身分の違いは、寮のほかの二人とは異なり、表面上のものに過ぎなかったのだから……。

8

二カ月たった。「まだ、内偵をつづけるのか？」と俺は、藤原に尋ねた。「もう、しばらく。完璧を期したいのです」という答えが返ってきた。〈さかな家〉の連中が内偵に気づく様子はなく、身の危険も感じなかったのだから、俺としても異存はなかった。

さらに二カ月が過ぎた。俺は、少々苛立ち始めていた。身に迫った危険はなくとも、次第

に不安がつのってくる。

「あと少し辛抱して下さい」と藤原は頭を下げた。

そして、もう一月。

「限界だよ」俺は、藤原に訴えた。山中に金を預けたことを後悔し始めていた。あれさえなければ、自分の計画を、ひとりで勝手に実行しているところだったのに……。

「そうだろうと思ってました」と藤原は言った。「実は、秘密保持のために内緒にしてみました。すでに内偵の段階は終わって、強制捜査の段取りを県警本部と詰めているところなのです。あと一週間だけ辛抱して、これまで通りへさかな家へ通いをつけて下さい。最後の我慢のしどころです。ここを乗り切りさえすれば、全てにうまく決着をつけます」

待ちに待ったかいがあった。ついにその時が来たのだ。俺は、藤原の言葉を聞いて、内心小躍りするようだった。

次の日曜日、いつものようにへさかな家へ行き、しかし、酒は控え目にして、早々にテールを離れた。そして、勘定の時、トモコさんに伝言を書いた紙切れを渡した。「一時間後、棧橋に来てくれ。ぜひとも聞いてもらいたい話がある」

俺は、勇気を奮い起こして、トモコさんの目をまっすぐに見詰めた。初めてのことだ。トモコさんの目はあまりに美しすぎて、俺はそれまでどうしても正視することができなかったんだ。

トモコさんは、目を伏せてあっさり同意の意思を表した。こんな「付け文」はもらい慣れているという同意の仕方だった。

俺は三十分後に棧橋に行き、三時間待った。しかし、トモコさんは現れなかった。予想していたことだ。大阪だったか東京だったかもう忘れたが、「美女の真心」と看板にうたったキャバレーがあった。きれいな女は心が冷たいもの、と昔から決まっているのだ。こんな変わりようのないありふれた真実に出喰わすと、かえって心が安まる。ずっと昔、俺は、見た目も心もおんなじくらい美しくない女に惚れてしまったことがあって……。

クソツタレめ。何としても藤原が湯微島から帰ってくる前に決着をつけなくてはならない。俺はへさかな家の外でトモコを張った。一時間も待ち、出て来たところをつかまえて、山際の人家の途絶えた辺りに引っ張っていった。大して抵抗もせずについて来たから、あの紙切れにも少しぐらいの効果はあったのだ。

モタモタしてはられない。直ちに用件を切り出した。

「詳しい事情は言えないが、君の身に危険が迫っている。今週中に、できたら明日かあさつてのうちに、何か用事ができたふりをして島を出るんだ。事情は後で分かるはずだ。島を出たら当分の間、身を隠し、島の連中とは連絡をとらないこと。でないと、厄介なことになる。これは、俺の大阪の友人の住所だ（俺はトモコさんにもう一枚の紙切れを渡した）。連絡を入れとく。きつと君をかくまってくれる。絶対に信用の置ける奴だ。俺も来週中にはそこに行く。どうか俺を信じて、すぐに島を出てくれ。何も聞かずに——」

「そんな話をいきなり聞かされてもなあ」トモコさんはのんびりした口調で言った。「ただでさえ驚いてしまうのに、その上、何も聞くな、ただ信じる言われたかて、これはちょっと、なあ」

「心からお願ひする。これ以上は言えないんだ。察してくれ」

俺は深々と頭を下げた。

「なら、一つだけ聞かせて。何でそんな親身になって、ウチなんかのことを心配してくれるのん？」

「それは……」俺は、別に純情な男でもないんだが、トモコさんのこの世のものとも思えない美しい瞳に見つめられると、うまく口がきけなくなる。「それは、俺が、君を好きで……」
「ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ」トモコさんはしまいまで聞かずに、笑いだした。その美貌からすると残念な上品とは言えない笑ひ方で。

「ひゃー、どうしよう。この二、三日、ウチ、急に男に持てるようになったみたいやなあ」
「……?」

「おとついなあ、昨日もなあ、あんたと同じ寮の人に、愛の告白されたんやもん。それが、そろいもそろってウチに島から出ろって言うんやわ。ウチ、この島が大好きやのにねえ」

寮の二人が、俺より先に愛の告白だって……?

「早よ、逃げる言われたかてなあ、よそから来た人の言うことやし」

つまり、あの二人もへさかな家の内偵をしていた……?」

「何でウチが逃げなあかんのやろ? 何が危ないっていうわけ?」

「あの二人も、君に事情を説明しなかったんだな?」

「いや、ほら、三十になったばかりやのに、頭のはげかかったオッチャン、おるやろ? 名前は忘れたけど、言うてたで。警察の手入れがあるからとか、なんとか」

バカめ！　なんてことをバラしてくれたんだ。

「そんなん、信じられへんし」

覚悟を決めて、俺はトモコさんに言った。

「いや、本当だ。多分来週中、遅くとも再来週の初めまでには、県警がこの島に踏み込むはずだ」

「なんでえ？」トモコさんは、愛らしく小首をかしげて、俺に問いかけた。「何で警察の手入れがあるの？　ウチら、何にも悪いことしてへんのに。ウチの店かて、この島の他の者かて、みんな真面目なのに」

「ソラゾラしいこと言うなよ。俺も知ってるし、君も知ってる。みんな知ってるんだ。この島の人たちが何を本業にしてるのか」

「ふうん」トモコさんは困惑の表情をつくってみせたが、目は笑っている。明らかに冷笑の気味を含んで。「何のこと言うてはるのんか、さっぱりわからへん」

「君らの方で、自分たち全員グルなんだと俺に見せつけたんじゃないか。最初に俺の給料をふんだくるに当たって、千円だけポケットに残したろ。そして、その千円を飲み代に請求したのは、トモコさん、君自身だったじゃないか」

「ひゃー、とんでもない言いがかりやわ」本気でないのが一目で分かる怒り顔になった。「でも、ここは我慢して、わけわからん難癖をつけてきた方に、ひとつ仇を恩で返してあげようかなあ。悪人はウチらやないで。あんたらの仲間にいるんや。その人が、一昨日の夜、こんなええもんウチにくれた」

トモコさんは、かっぱう着のポケットの底から指輪を取り出した。

「あんまり大きくはないけど、本物のダイヤなんやて。その人は、あんたやらハゲのオッチャンやらと違うて、ウチに逃げろなんて言わんかった。逆や。俺は明日中に逃げなくちゃならん、もうこの島には戻れへんけど、俺を忘れないでくれって。しばらく経ったら連絡する、そしたら俺のところへ来てくれ、とは言うたけども。ウチ、あいつには考えとくと答えたんや。なんせダイヤやもん。けど、あれはほんまもんの悪党やからね。ウチらは真面目に暮らしてるけど、そういう悪人を見つけるの得意にしてる人がおってな、あいつが最初に店に顔を出した時、キッパリ脅しつけたんや。何のつもりで来たんか知らんが、地の者に手をついたら承知せえへん。やるんやったら採石場のよそ者だけにせえ、て。そんな言われたあと、一年も島におるんやから、あいつ、あんたらの寮で、よっぽど手の込んだワルサやってるんやろな」

「あいつ……って、指輪をくれたのは、もしかして、藤原、か？」

「いやあ、やっぱり、わかってしもた？　こないもんくれた人の悪口、言いたくなかったんやけどなあ」

俺は、すっかり暗くなった切り通しの道の真ん中に、ヘナヘナすわり込んでしまった。呆然としていた俺のポケットから、残りの所持金をくすねていったのは、トモコさん自身だったのか、様子をうかがっていた別人だったのか……。

その夜、藤原は寮に戻って来なかった。翌日も、その後も、ずっと。

俺は、その後も長く固石島にとどまった。トモコさんがいたから？ その通り。でも、それだけじゃない。藤原が戻って来るのを待ってとっつかまえようと思ってた。県警の内偵などと言って三人分の給料を毎週くすね続けるのは、詐欺の手口にしちゃ、いかにも効率が悪しい危険だ。そんな手を考えついたのも、島にいてトモコさんを口説き落としかったからに違いない（奴は、湯微島で、時々トモコさんと会っていたようなのだ）。

しかし、藤原は戻って来なかった。代りに、ある日トモコさんが島から姿を消した。奴の気持ちにトモコさんに通じたものらしい。その後、二人の消息は知れない。全国に広がる島の泥棒組織の網にもかからなかったところからすると、外国へ逃げたのかもしれない。俺は百万円出して請け合ってもいいんだが、藤原は、トモコさんと一緒になって、地獄の苦しみを味わっているはずだ。トモコさんの美しすぎる容姿は、暴風雨を引き起こす特大低気圧のようなものだ。固石島にとどまっていた間は大した被害にもならなかったが、広い世間に飛び出した途端、数え切れないトラブルを引き起こす性悪な台風の本性を発揮することになって——負け惜しみだな。

俺は、トモコさんがいなくなっても、島を出なかった。その頃、もう島の中で身動き取れなくなっていたのだ。

あの「告白」以降、トモコさんは同情してくれて（と俺は思ったんだが）、付けて酒を飲ませてくれるようになった。そして、いくら経たないうちに、毎週の給料は、俺を素通り

して行くのは前と変わらなかったが、今度は、藤原のポケットじゃなくて、へさかな家」に吸い込まれるようになった。やがて、毎週の給料だけでは足らなくなり……。ちなみに給料は俺じゃなく、初めはトモコさんが、トモコさんがいなくなると、出戻りだというこれも結構な美人のトモコさんの姉のチヅコさんが、採石場の奴から直接受け取るようになった。払っても払っても、借金はドンドン増えていくばかりだ。

気づいた時には、俺は採石場をやめ、島の泥棒組織の下っ端として盗みの仕事を始めていた。盗みといっても、よそ者で素人の俺は下働きが主で、島の外で仕事をする時には、いつも監視付きだった。

広島の方に出かけた時だったかな。どこか見覚えのある顔の男と組んで仕事をするようになった。アジトに使っていたアパートで話をするうち、男は、俺が最初に「さかな家」に行った時店にいたよそ者三人組のひとりだってことが分かった。三人組は、店の中で所持金を全部盗み取られ、勘定が払えないどころか、帰りの船賃さえなくなり困り果てていたのだ。常連客の一人が親切ごかしに金を貸してくれ、その借金をきっかけにズルズル泥棒稼業に引き込まれたのだそうだ。残りの二人のうち、一人は今もどこかでこき使われているはずだが、もう一人は少し前から所在が知れない。どうやら逃げ出そうとして失敗し、魚の餌にされたらしい……。

「バカな奴だな」と俺は言った。その頃、俺はもうスッカリ組織の一員になり切って、逃げ出したいだの、カタギに戻りたいなどとは考えなくなっていた。しかし、話をした男の寂し気な横顔を見て、少々心がうずいた。

そして……俺は本土での仕事を終えて固石島に戻り、しばしの休暇を過していた。固石島での休暇といったら「へさかな家」で酒を飲む以外にやることはない。昼前に起き出して、そのまま「へさかな家」に行き、閉店するまで飲み続けるのだ。出戻りのチッコさんは、トモコさんと比較して容姿はやや劣るものの、美人の範疇に入るのは確かだ（直接並べて較べるわけじゃなし）、愛想は妹より少しはマシだ。言葉づかいは変わらないが、少なくともコップや皿をテーブルに音を立てて置いたりほしくない。

日曜日、採石場の給料が出た翌日、これから、新入りが「へさかな家」に行くと、寮の管理人から連絡が入った。

店に天才少年スリ、小学五年生のタク坊が呼ばれ、出入口のそばで待機する。俺は、同じ非番の仲間とチビチビ酒を飲みながら、成り行きを眺めている。店のテーブルにいるのは、みんな泥棒だ。座敷は幹部連中の定席で、そこには固石の地の者しか上がれない。

新入りの男が店の戸を開けてから起こったことは、俺の時とまるっきり同じ繰り返しだった。何も気づかずにビールを飲んでいる男の間抜け面……。周りの連中はニヤニヤ笑っていたが、俺は、自分もこんな調子だったのかと思うと、恥ずかしいやら、情けないやら、とても正視できなかった。俺が泥棒稼業から足を洗う決心をしたのは、この時なのだ。

死以外に組織を抜ける道はない。俺は関西のある町で盗みの見張りをしている最中に、現場近くの公園の木にぶらさがった。首をつって死なず、気持ち良く失神する方法を、大昔に知り合いだった男から伝授されたことがあった。もちろん本当の命がけには違いないのだが。仲間は俺を放り出して逃げ去った。救急車のサイレンをかすかに聞いた覚えがある。

それ以来、固石島にも湯微島にも行ったことがない。それどころか、あの近辺の県には近づかないようにしている。仕方のないことだ。

まさか懐かしいというのではないが、あの島での暮らしを思い出すことはある。やっぱり〈さかな家〉のことが中心だ。湯微島に行くついでに固石島にも足を伸ばすのだったら、ぜひあの店を見て来て、どうなっているのか様子を俺に教えてくれないか。タク坊は相変わらず目覚ましい仕事をやってのけているか。今もチツコさんは独り身のままで働いているのか。それに、もしトモコさんの消息が分かったなら……。

もう一つだけ付け加えておこうか。俺の頭が、勝手に、とても変なことを考えて、バカバカしい思いながら、どうしてもその考えを消すことができないでいるのだ。

〈さかな家〉のことを思い出すだろ。あのペンキ塗りの看板の下に立った俺は、引き込まれるように店の扉を開けてしまう。するとな、いるんだよ……誰って、この俺自身がさ。あの島の泥棒特有のドロロンと赤い目をして、間抜け面で店に入って来た俺を、テーブルに肘をつきニヤニヤ笑いながら見ているというわけだ。なぜこんなことを考えるのか、それは俺にも分からないんだがな。

「湯微島の隣りの島」は、一九八七年一月に書いた「鳥の女王」というごく短いお話（未発表）が元になっています。文芸誌「三田文学」（三田文学会）に「湯微島訪問記」を連載するに際し、このお話の設定の一部を用いて短編に仕立て、連作長編小説の最初の一編としました（一九八八年夏季号掲載）。この連載は後に同題の単行本としてまとめられました（新潮社、一九九〇年刊）。今回の「湯微島の隣りの島」は単行本版を元にしており、大きな改変は行っていません。

湯微島の隣の島

発行 令和元年 七月一日

著者 伊井直行 II Naoyuki ©2019

発行所 レワンニワ書房 <https://rewaniwa.com/>

Rewaniwa

